「愛してる」なんてことば、日本人は口にしない。日本人は奥ゆかしいからだ。
でもいい言葉だと思う。普段耳にしなくても、小説や映画でこのことばを交わしているのを見ると、心が温かくなる。

じゃあそのことばを何回も繰り返してみよう。
「愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる」
……コワい。愛というより呪いに聞こえる。

きっと、感情というものは大きさが重要なのだと思う。種類でなく。だから、愛を繰り返すと呪いに聞こえるのだ。

川上未映子の短編『ウィステリアと三人の女たち』では、この愛であり呪いであるもの――”想い”とでも呼ぶべきもの――が一文一文から滲み出てくるような物語である。

物語の主人公の「わたし」は夫に不妊治療の話を持ち掛けるが、体よく断られ、さらには責めなじられてしまう。
その後「わたし」は向かいの「ウィステリア」の屋敷に忍び込み、「ウィステリア」の人生を夢見るような、不思議な体験をすることになる。
夢の中で体験した「ウィステリア」の人生は、まさに”想い”に満ちたものであった。愛する人への”想い”、そして、生まれてこなかった子供への”想い”……。

しかしその体験を「わたし」にいざなったのもまた、「わたし」の、夫に対する”想い”なのだ。

一見すると単純な愛憎を書いた物語のようである。登場人物の写真を並べて、赤のペンは”すき”、青のペンは”きらい”として、矢印を書いて相関図を作れるような。

しかし読み進めるうちに、私は、登場人物の感情に疑いを持つようになった。「ウィステリア」の愛する人への想いは、真に純粋なものなのか。主人公の「わたし」から見た夫の姿と同時に存在するはずの、夫から見た「わたし」は果たしてどういう姿なのか。

「ウィステリア」の感じる、子供を殺してしまったという罪悪感や、誰にも会わずに家中を掃除して毎日を過ごす姿。そしてラストシーンの、藤の花にひしめき覆われた「わたし」。

どこかこの作品を、愛の物語とも呪いの物語とも呼べない不穏さがそこにあり、適格な表現をしようとするならば、私はこの作品を、とても完成度の高い「”想い”の物語」だと称せざるを得ないのだ。